

ニッポンバラタナゴ ~保護と環境保全~

河内のキンタイ

コイ科魚類のニッポンバラタナゴは、淡水二枚貝である生きたドブガイのえらの中に上手に托卵するという習性を長い歴史のあいだに進化させた。

高安山が新緑に包まれる頃、里山のため池にそっと潜ると、雄は真っ赤なバラ色の婚姻色を現し、他の雄を追い払いながらドブガイの周りに縄張りつくっている。雌は細長い産卵管を伸ばし、雄に誘われて貝の上でペアになる。雄は背びれと尻びれを細かくふるわせ、雌に求愛するのである。すると雌はドブガイの出水管を覗き込み、貝の状態を伺ながら一気に沈み込み、産卵管を貝の出水管に挿入し卵を貝のえら内に産み込む。その直後に雄が入水管の上で素早く放精し、卵は貝のえらの中で受精される。

えらで発生しはじめたニッポンバラタナゴの卵はドブガイに保護され成長し、一ヵ月後にハミりくらいの仔魚となり、元気よく出水管から泳ぎ出してくるのである。このような一風変わった習性をもつニッポンバラタナゴを保護するためには、ドブガイも生息できる環境全体を保全することが大切なのだ。

進化という歴史の消滅

以前は琵琶湖淀川水系以西に多く生息していたニッポンバラタナゴも、現在では、この河内平野のため池や香川県のため池および九州の一部の水系にしか見られなくなってしまった。ニッポンバラタナゴが急減した要因は、環境汚染による水質汚濁や外来種であるブルーギルやブラックバスによる捕食圧が大きく関わっているが、それに加え、特殊な要因として、近縁のタイリクバラタナゴとの交雑が進行していることである。

タイリクバラタナゴとニッポンバラタナゴは同種ではあるが、日本列島と中国大陸が日本海湖によって分断された後、互いに異なる地域で長い歴史を歩み、遺伝的に異なる亜種として進化してきた。しかし、戦後の食糧難の時期に人間の手によって大陸から食用として持ち込まれたソウギョと共にタイリクバラタナゴも移入されてしまった。その後、さらに人間の手によって全国に拡がり、タイリクバラタナゴとニッポンバラタナゴが交雑することで、数十万年から数百万年かけて分化してきた長い進化の歴史が今消えようとしているのである。

自然保護

ところが、どういうわけか、八尾市や香川のため池に隔離された状態でニッポンバラタナゴが村の生活と共に保存されていたのである。そこで八尾市においての一九八〇年頃からニッポンバラタナゴの保護活動がはじまり、地元の高安から万博公園や東宮御所の保護池へ一時避難することになった。

本来、自然保護を考える場合、その生物種が長い歴史を生きてきたその風土を大切に保護したい。その生物が息する健全な生態系が維持されなければ、保護することの意味が半減するだけでなく、生き物である限り、生きていけるわけがない。そこで二年前に、地元の環境保全を考える高安ニッポンバラタナゴ研究会が発足され、保護運動として一九九九年の五月にニッポンバラタナゴの保護池が造成されたのである。

地域の歴史文化である村祭りと同じようにして、人々の生活と共に保存されてきた自然環境を大切にしながら、ニッポンバラタナゴの保護を考えていきたい。

ため池と村の暮らし ～循環型社会とは何か～

八尾市高安には四〇〇あまりのため池が点在する。里山を耕作するための農業用水としてかつては多いに利用されていた。田植え期における灌漑用水として水を使い、稲刈りがすめば、底樋を抜き池の水と底にたまった泥を流す。この泥混じりの水を田畑に引くことによって、土地改良を行っていた。このような泥水を流すことを『ドビ流し』と言ったそうだ。葎仲先生に話を伺うと、ドビ流しには大きく三つの意義があるそうだ。

一つは、池の掃除、

二つ目は、田畑の土壌改良、

三つ目は、秋の食材として雑魚やエビそしてドブガイを利用することである。

しかし、キンタイ(バラタナゴ)はにがいのでみんな流されてしまったそうだ。言ってみれば、ドビ流しとは今年の良作に感謝し、来年の豊作を祝う秋祭りの体を成していたのではないだろうか。何んと合理的で、すばらしい知恵なのだろうか。今いうところの循環型社会の原形がここにあったのだ。

池の小宇宙

池の中をのぞいてみると、バラ色に輝いたニッポンバラタナゴの雄がドブガイの周りに縄張りを持ち、雌と番いになる。雌はドブガイのえらの中に卵を産みつけ子どもを保護してもらうのだ。この面白い習性は、淡水のタナゴ類はみんなもっている。

ドブガイは、もともと自分の卵をえらの中で育てる習性があり、ついでにタナゴの子どもも育てるようになったみたいだ。ドブガイの幼生(グロキディウム)は貝の出水孔から吐き出されると、周囲に広がり池の底に沈む。ドブガイの幼生は、このままではみんな死んでしまうのである。

そこで、ハゼの仲間のヨシノボリが現われ、その子どもたちをヒレやえらで拾い上げていくのだ。ドブガイの子どもたちは、ヨシノボリにしっかりくっつき、栄養をもらい、二十日間ほどすると底棲生活にはいる。

ヨシノボリの雄は石の下や砂に穴を掘り、産卵後の卵をまもる。そして卵からかえったヨシノボリの稚魚は動物プランクトンを食べる。一方、ニッポンバラタナゴの子どもたちは植物プランクトンを食べて成長していく。ドブガイの子どもたちも池の底で増えるケイソウを食べて大きくなるようだ。

しかし、この池の小宇宙も放っておくと水が濁り死に絶えてしまう。そこで、年に一度のドビ流しをすることで、また、新しい小宇宙が始まるのである。
